

Title	言語類型論をめぐる諸問題：言語の多様性と普遍性の追究について
Sub Title	Recent issues in linguistic typology : linguistic diversity and the pursuit of language universals
Author	古賀, 裕章(Koga, Hiroaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2022
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.143 (2022. 2) ,p.163- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	辻幸夫先生・武藤浩史先生・太田昭子先生・ジェームズ・レイサイド先生退職記念特集号 研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000143-0163">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000143-0163</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 研究ノート

# 言語類型論をめぐる諸問題：言語の多様性と普遍性の追究について<sup>1)</sup>

古賀裕章

## 1. はじめに

ここ10年程の間、言語類型論の分野では個別言語の記述のためのカテゴリー（descriptive categories）と、言語間の比較のための概念（comparative concepts）の区別、および両者の関係について激しい論争が巻き起こっている。例えば、雑誌 *Linguistic Typology* の20巻2号（2016年）に掲載された論文はすべてこの論争に関するものである。また、同誌の24巻3号（2020年）では、この問題の核心に位置する比較可能性（comparability）について、哲学、生物学、進化生物学、化学など他分野における知見を踏まえた検討がなされている。

個別言語の記述カテゴリーと比較概念とを明確に区別する必要性を（強硬に）主張し、両者を混同することに警鐘を鳴らす立場の旗頭が Martin Haspelmath である。のちに詳述するが、彼の主張を一言で述べるならば、個別言語の名詞、動詞、主語、目的語、対格、能格といった諸々の形態統語的カテゴリーは言語ごとに異なるため、言語間の比較を行う場合には、それらとは存在論的に異なるカテゴリー、すなわち個々の言語の記述のためのそれとは別な、比較の目的に特化した概念が必要である、というものである。彼のこの主張は2007年の *Linguistic Typology* の11巻1号に短い論考として（おそらく）初めて登場し、その後 Haspelmath (2010) において、おおよその全貌、つまり主張の詳し

い内容とその根拠、および比較概念の具体例とそれに基づく言語間の比較の事例がいくつか提示された。

彼の考えには、Newmeyer (2007, 2010) のような生成文法論者のみならず、機能主義の立場から言語の記述、比較を行うフィールド言語学者や類型論者からも疑問や異論が多く提出されている (Himmelman 2021; van der Auwera and Sahoo 2015; その他、上述の *Linguistic Typology* 20 巻 2 号を参照)。また、Haspelmath の考えを敷衍していくと、アメリカ構造主義の暗黒に立ち戻ってしまうのではないかと危惧する向きもある。<sup>2)</sup>

Haspelmath (2010) 以降、この論争が本格化するわけだが、彼の主張と同様、または少なくとも類似した主張や考えは、Dryer (1997), Croft (2001), Lazard (2002) などにすでにみられる。とりわけ、文法関係の普遍性を明確に否定する Dryer (1997) は、William Croft が *Radical Construction Grammar* を構想、執筆するきっかけになったとされており、この立場を主張する先駆的な論考と考えると差し支えない。

本稿の目的は、ここ 2、30 年の間に、個別言語の記述の蓄積をとおして明らかとなってきた言語の多様性を概観することで、個別言語の記述カテゴリーと比較概念をめぐる論争が生じている背景を明らかにしつつ、言語類型論、言語の普遍性と多様性の追究をめぐる諸問題を考察することにある。

## 2. 個別言語の記述カテゴリーと、その比較可能性

冒頭で述べた通り、言語間の比較を行うためにはそれに特化した、つまり個々の言語の記述カテゴリーとは異なる概念が必要であると Haspelmath (2007, 2010) が強く主張する背景には、個別言語における名詞、動詞、主語、目的語といった形態統語的カテゴリーは通言語的 (crosslinguistic)、普遍的な (universal) カテゴリー (またはその具体例) ではなく、言語によって異なるという事実がある。さらに、Haspelmath はそれほど強調していないが、Croft (2001, to appear) が強く主張するように、単一言語内においてさえもカテゴリーが構文ごとに異なるという、見過ごされがちな事実が存在する (Cristofaro 2008 も参照)。具体的

な事例の検討をとおして問題を整理していこう。

## 2.1. 言語間の問題

言うまでもなく、当該のカテゴリーを認定するための形態的標示や構文が、すべての言語に等しく備わっているわけではない。例えば、人称や数の一致が形態的に標示される語幹は動詞であるとか、動詞に人称や数の一致を引き起こす名詞句（一致のコントローラー）が主語であると規定するとしても、日本語や中国語には人称や数の一致が存在しない。また、尊敬語化（honorification）の対象になりうるかどうかや（尊敬語化の対象になりうる名詞句が主語：「花子さんが太郎さんをお褒めになった」という文では、尊敬語化の対象と解釈されるのは「花子さん」であり「太郎さん」ではありえない）、再帰代名詞「自分」の先行詞になれるかどうか（「自分」の先行詞になれる名詞句が主語：「花子は太郎を自分の部屋に呼んだ」の「自分」は「花子」と同一指示としか解釈されず「太郎」を指す解釈は許容されない）が日本語の主語を認定する基準として挙げられるが（柴谷 1985）、英語を含めた多くの言語には尊敬語化は存在しないし、日本語の「自分」は英語の再帰代名詞とは、実際にはかなり違った振る舞いをみせる（Hirose 2014）。

次に、同じ（と前提される）形態的標示、構文を当該言語が持ち合わせていたとしても、それによってカテゴリー化されるメンバーが個々の言語によって大きく異なる場合がある。例えば、品詞について考えてみよう。通常、テンス・アスペクト・ムード（TAM）、人称や数の一致が形態的に標示される語幹は動詞であるとされる（Bybee 1985）。この基準にしたがえば、英語の *my father walks every morning* における *walk* は動詞と判断されるが、*my father* のような親族名称を表す語は動詞とは別の品詞（名詞）のメンバーとされる。ところが、英語の (*my*) *father* や日本語の「(私の) 父」のような親族名称を指す語彙が、イルガル語（オーストラリア・イワイジャ語族）では (1a) のように人称・数・性・格（文法関係）の一致とテンスの標示を取り、(1b) の「殴る」という意味を表す他動詞語幹と同じ形態統語的な振る舞いを示す（Evans 2000: 103）<sup>3)</sup> (1a) のような一連の「親族動詞」と呼ばれる語幹を指示表現として使用する場合（つまり名詞の最も基本的な命題行為機能を担わせるには）、(1c) のように（主要部な

し) 関係節のパターンを取らねばならないという。<sup>4)</sup>

- (1) a. *ŋa-ni-maɣyarwu-n* Ilgar  
 1SG.ABS-3SG.M.ERG-be.father.to-NPST  
 ‘my father ([lit. He is father to me.])
- b. *ŋa-ni-wu-n*  
 1SG.ABS-3SG.M.ERG-hit-NPST ‘He is hitting me.’
- c. *ɹagabaɹa yi-wu-wu-ŋ ŋabi*  
 that 3SG.M.ABS-3PL.ERG-kill-PST 1SG  
*a-maɣyarwu-ŋ aŋmun-maŋarɣbu-n*  
 1SG/3M-be.father.to-PST 2SG/3PL-clean.out-NPST  
*ɹaga ar-argbi*  
 DEM REDUP-person  
 ‘Because they killed my son (i.e., the one whom I am gather to), you clean out those people.’ (Evans 2000: 104)

さらに、マカ語(ワカシ語族)では、(2)のように人称・数の一致やムードがほとんどの語彙的語幹に形態的に標示されうる。(2a)は他言語においては通常動詞、(2b)は名詞、(2c)は形容詞、(2d)は副詞とされる語幹である。

- (2) a. *k'upsil baʔas ʔu-yuq.* Makah  
 point.MOM.IND.3 house OBJ ‘He is pointing at the house.’
- b. *babaʔdis*  
 white.man.IND.1SG ‘I’m a white man.’
- c. *ʔi.ʔi.xʷʔi*  
 big.IND.3 ‘He is big.’
- d. *hu-ʔaxis haʔukʷap*  
 still.IND.1SG eat.CAUS ‘I’m still feeding him.’

(Croft 2001: 76 taken from Jacobsen 1979: 110-111)

当然ながら、(2a-d) の文頭に生起し、人称・数やムードの屈折を示すマカ語の語幹がすべて動詞だというわけではない。(2) が示すのは、TAM や人称・数の屈折などが「通言語的な動詞」というカテゴリーを規定する基準にはなりえないという事実である。結局、これらの語幹はマカ語において有効な別の形態統語的基準に基づいて、適切にそれぞれの品詞に文類される (Croft 2001)。日本語において、尊敬語化や「自分」の先行詞になりうるかどうかなどの日本語特有の形態統語的な基準で、「日本語の主語」が規定されるのと同様である。

## 2.2. 言語内の問題

次に単一の言語内に観察される問題として、まず、動詞に関する簡単な例を見てみよう。人称・数の一致が形態的に標示される語幹が動詞であると規定したとする。マリコバ語 (ホカン語族) では主節であっても (3a)、法助動詞 (modal verb) の補文節であっても (3b)、動詞 (とされる) 語幹に人称の一致が標示される (Cristofaro 2009: 450 taken from Gordon [1986: 42, 431])。よって、マリコバ語では主節内か補文節内にかかわらず、この基準によって (3a-b) の下線部の語幹は問題なく動詞と認定される。

- (3) a. Pam-sh      kwnho      m-aay-m      Maricopa  
      Pam-SBJ      basket      3/2-give-REAL      'Pam gave you the basket.'
- b. hanmo-ny-a      m-uusoo-h-sh      duu-m  
      chicken-DEM-VAUG      2-eat-NMLZ-IRR-SBJ      be-REAL  
      'You are supposed to eat the chicken.'

一方英語では、*I am supposed to go/he is supposed to go* のように、主節の場合とは異なり、法助動詞の補文節においては下線部が示すように、人称・数の一致が標示されない。つまり、単一言語においても主節かある種の従属節かの違いに応じて、同じ要素 (この場合、動詞とされる語幹) の形態統語的な振る舞いが異なる場合があるわけである。

また、単一言語内においてアラインメントのパターンが分裂するケースはそ

れほど珍しくない。Comrie (1989) にしたがって、自動詞文の唯一項を S、他動詞文のより能動的に行為を行う側の項を A、もう一方の典型的に A の行為によって影響を被る側の項を P とする。TAM や名詞句のタイプに基づく能格性の分裂はよく知られているが (Dixon 1994)、一般的にいずれも主語の認定基準とされる格標示 (依存部標示) と人称・数の一致標示 (主要部表示) のアラインメントが分裂する場合がある (Nichols 1986)。比較的広くみられるのは、格標示が能格型 ( $A \neq S = P$ ) であるのに対して、一致標示が対格型 ( $A = S \neq P$ ) を取るケースである。(4) はワルピリ語 (パマ・ニュンガン語族)、(5) はエンガ語 (パプア諸語) からの例である。

- (4) a. *Ngaju-ø ka-rna purla-mi* Warlpiri  
 1SG-ABS PRS-1SG shout-NPST 'I am shouting.'
- b. *Ngaju-rlu ka-rna-ø wawiri-ø pura-mi.*  
 1SG-ERG PRS-1SG-3SG kangaroo-ABS cook-NPST  
 'I'm cooking the kangaroo.'
- c. *Ngaju-rlu ka-rna-ngku karli-ø yi-nyi nyuntu-ku.*  
 1SG-ERG PRS-1SG-2SG boomerang-ABS give-NPST 2SG-DAT  
 'I am giving you the boomerang.' (Van Valin & LaPolla 1997: 368)<sup>5)</sup>
- (5) a. *akáli dóko p-é-á* Enga  
 man DEF go-PST-3SG 'The man went'
- b. *namba-mé mená dóko p-í-ó*  
 I-ERG pig DEF hit-PST-1SG 'I hit (killed) the pig.'  
 (Van Valin 1981: 367)

ワルピリ語では、助動詞と動詞が複合的に TAM を表す。そして、代名詞接辞による人称・数の一致は助動詞に標示される。助動詞に直接後接するのが主語の一致、主語の一致に後接するのが目的語の一致とされる (Hale 1983: 17; Swartz 1985: 151)。(4a-c) からわかるとおり、主語の一致を引き起こしているのは、S

(4a) と A (4b-c) であり、対格型アラインメントを示す。ところが格標示は、A が有標の能格で、S と P が無標の絶対格で標示される能格型である。

(5) のエンガ語も同様に、格標示に関しては S と P が無標の絶対格、A が有標の能格で標示されており、能格型のアラインメントである。一方、ワルピリ語同様、人称と数の一致をコントロールする項は S (5a) と A (5b) であり対格型のパターンを示す。ほかにも、カルカトウング語 (Kalkatungu; パマ・ニュンガン語族; Blake 1976) やネパール語 (Nepali; インド語派; Bickel and Yadava 2000) などでも同じアラインメントの分裂が観察される。

グルジア (カルトヴェリ語族) では、いわゆる Series II (不定過去および希求法) のテンスにおいて、格標示が活格型 (active, active-inactive;  $A = Sa \neq Sp = P$ )、一致標示が対格型というアラインメントの分裂が観察される (Harris 1981, 1982)。グルジア語における自動詞分裂 (split intransitivity) は、終結性 (telicity) によって決定づけられる (Arkadiev 2008; Harris 1981, 1982)。(6a) の A および (6b) の非終結的自動詞の唯一項 Sa (Satelic) が能格で標示される一方、(6a) の P と (4c) の終結的自動詞の唯一項 Sp (Stelic) は主格 (無標) で標示されるため、格標示のパターンは活格型である。ところが、一致標示においては Sa と Sp の区別が中和され、A と S が一致を引き起こす対格型である (-a は三人称単数の主語一致標識であり、三人称単数の目的語一致標識はゼロ; 詳しくは Harris (1982: 29) 参照)。

- (6) a. *Vano-m gamozard-a zma.* Georgian  
 Vano-ERG 3SBJ.grow.II.3OBJ brother.NOM  
 'Vano raised his brother.'
- b. *Bavšv-ma iṭ'ir-a.*  
 child-ERG 3SBJ.cry.II 'The child cried.'
- c. *Rezo gamoizard-a.*  
 Rezo.NOM 3SBJ.grow.II 'Rezo grew up.' (Harris 1982: 293)

トライ語 (Tolai; オセアニア諸語でクアヌア語とも呼ばれる) では、格標示の形態的模式は中立型 (neutral) であるが、語順が活格型を示す。他方、動詞



の一致はほかのオセアニア諸語同様、対格型のアラインメントを示す (Foley 2005; Mosel 1984)。

- (7) a. *a tutana i vana* [Sa V]  
 DET man 3SG go 'the man went'
- b. *i ga io ra pal* [V Sp]  
 3SG REM burn DET house 'the house burned'
- c. *a tutana i kita ra bul* [A V S]  
 DET man 3SG hit DET child  
 'the man hit the child' (Foley 2005: 398)

三人称単数形態素 *i* は Sa (7a), Sp (7b), A (7c) との人称・数の一致を示しており、一致については対格型であることがわかる。しかし、語順に注目すると、Sa と A は動詞の前に、Sp と P は動詞の後に生起しており、この対立は活格型のそれである。

さらには、目的語の格標示と一致標示のパターンが分裂する言語もある。Haspelmath (2005) にしたがって、複他動詞文における受け手 (recipient-like) に相当する項を R, モノ (theme-like) に相当する項を T とする。(8) のヒョウ語 (チベット・ビルマ語族) の例では、格標示については他動詞文の P と複他動詞文の T が無標 (直接目的語) で、場所格で標示される R (間接目的語) と対立しており、間接型 (indirective;  $P = T \neq R$ ) のアラインメントを見せる。一方、人称・数の一致を引き起こすのは P と R (primary object = 一次目的語) であり、T (secondary object = 二次目的語) と対立しているため二次型 (secundative;  $P = R \neq T$ ) である (Dryer 1986)。

- (8) a. *yɔntuʔa uy=la key ʔɔ-ŋoʔwey-sɔ* Hyow  
 yesterday dog=ERG I 1SG.P-bite-CONCL  
 'Yesterday a dog bit me.'

b. <i>cu=la</i>	<i>key=a</i>	<i>cɔ</i>	<i>ʔe-pek</i>
he=ERG	I=LOC	book	<u>1SG.R-give</u>
'He gave me a book.'			(Peterson 2003: 174, 179)

前出 (4) のワルピリ語の例でも同じ分裂が観察される。格標示については、(4b) と (4c) からわかるとおり、P と T が無標の絶対格で標示されている。(4c) との対比で明らかなように、これが与格で標示された R と対立しているため、間接型である。一方、人称・数の一致については (4b) と (4c) の対比が示すとおり、P と R が目的語の一致を引き起こしており、二次型アラインメントである。

例文 (4-7) のような格標示と一致標示にみられるアラインメントの分裂は、形態的標示 (coding properties) が「主語」の認定基準としてはあてにならないという Anderson (1976) の主張を支持するよう見えるかもしれない。Anderson は、格標示や一致において能格性を示す言語は、ジルバル語 (Dyirbal: パマ・ニュンガン語族) のような「一握りの」言語を例外として (ibid.: 15), 等位構造縮約 (conjunction reduction; 等位構文における同一指示項の省略), 同一名詞句削除 (equi-NP deletion), 再帰代名詞のコントロールといった統語的な振る舞い (behavioral properties) においては、そのほとんどが対格型の振る舞いを示すとして、能格性をあくまでも表層の、形態的な現象だと特徴づけた (surface/morphological vs. deep/syntactic ergative)。

Anderson (1976) の主張を整理すると、(4) から (8) までで見てきたアラインメントはあくまでも表層的な形態的アラインメント (cf., (7) のトライ語では語順も関連している) であり、その分裂・非一貫性が示すとおり、統語的な「主語」を規定する基準にはならず、統語的アラインメントは、ジルバル語のようなごく少数の例外を除いて、普遍的に、一貫して対格型だという大胆な主張である。事実、(4) のワルピリ語や (5) のエンガ語は、統語的には (つまり behavioral properties については) 能格型のアラインメントを示さないという (Hale 1983; Li and Lang 1979; Van Valin 1981)。

ところが、実際には統語的な振る舞いにおいてもアラインメントの分裂を示

す言語は、特に形態的能格性を示す言語では決して珍しくない。<sup>6)</sup>具体例を見る前に、以下の議論で使用される統語的な主語の認定基準とされる構文を簡単に確認しておこう。

Keenan (1976) は、主語を認定するための約 30 の基準を提示しているが、以下ではそのうち、等位構造縮約 (ibid.: 317 の 3.4.3), 交代指示 (switch reference) 標示のコントロール (ibid.: 315 の 3.2), コントロール構文における同一名詞句削除 (equi-NP deletion; ibid.: 316-317 の 3.4.2), 関係節化・*wh* 疑問・分裂構文 (cleft constructions; ibid.: 320 の 3.13), 繰り上げ構文 (raising constructions; ibid. 320 の 3.16) を考察する。通常、等位構文、交代指示構文において、同一指示項の省略が可能なのは主語であるとされる。コントロール構文における同一指示名詞句の削除は、‘want’, ‘try’ のような主節のコントローラーと従属節の削除対象の両方が主語とされるものと、‘persuade’, ‘order’ のようなコントローラーが目的語で削除の対象が主語となるものにわかれるが、削除の対象はいずれも通常主語とされる。また、Keenan and Comrie (1977) の研究でも明らかにされているように、通言語的に関係節化の対象に最も容易になりうるのは主語であり、言語によっては主語しか関係節化の対象になれない。また、分裂構文や *wh* 疑問文で焦点になりやすい項も主語とされる。そして、繰り上げ構文において従属節から繰り上げられる対象に最もなりやすいのは、主語である。つまり、これらの統語構文で同定されるカテゴリーは典型的に主語を含むとされる。

それでは、統語的アラインメントの分裂の具体例を見てみよう。チュクチ語 (チュクチ・カムチャツカ語族) は、格標示において能格型のアラインメントを示す。統語面に注目すると、(9a-b) に示すように否定小辞 (-*ka-lʔ*) よって直接関係節化されうるのは S と P のみであり、A を関係節化する場合には (9c) のようにヴォイスの変更が必要となる。つまり、逆受動態 (antipassive) により、A が S に派生されねばならない。これは能格型のアラインメントである。

- (9) a. *e-tipʔeyye-ka-lʔ-in*                      *newəçqet*      *ragtə-gʔe*.      Chukchi  
           NEG-sing-NEG-PART-ABS.SG    woman            go.home-3SG  
           ‘The woman who (S) was not singing went home.’

b. *igər a-yoʔ-kə-lʔ-etə enm-etə mən-əlqən-mək.*  
 now NEG-reach-NEG-PART-to hill-to 1PL-go-1PL  
 ‘Now let us go to the hill which (P) (someone) didn’t reach.’  
 (Comrie 1979: 226)

c. *en-agtat-kə-lʔ-a qaa-k ʔaačək-a*  
 ANTIP-chase-NEG-PART-INSTR reindeer-LOC youth-INSTR  
*winret-ərkan-inet ɲewəčqet-ti.*  
 help-PRS-3SG.ERG-3PL.ABS woman-ABS.PL (Manning 1995: 28)  
 ‘The youth who (A) dos not chase the reindeer is helping the women.’

一方, Comrie (1979: 226) によると, (10) にみるコントロール構文をはじめとして, チュクチ語のその他の統語構文におけるアラインメントは対格型だという。(10a) では, 不定形動詞は自動詞であり, 主節のコントローラーである P と同一指示であるため削除されている項は S である。(10b) では, 不定形動詞は他動詞であり, 削除されているのは A である。P の削除は許されない。

(10) a. *gəm-nan gət tite mə-winret-gət ermetwi-k.*  
 I-ERG 2SG.ABS sometime 1SG-help-2SG grow.strong-INF  
 ‘Let me help you some time to (S) grow strong.’

b. *morg-ənan gət mət-re-winret-gət riwl-ək əmalʔo*  
 we-ERG 2SG.ABS 1PL-FUT-help-2SG move-INF all.ABS  
*geče-yo-t*  
 collect-PASS.PTCP-ABS.PL  
 ‘We will help you to (A) move all the collected items.’

(Comrie 1979: 226-227)

シベリア・ユピック語 (エスキモー・アレウト語族: Asiatic Eskimo ともいう) でも, チュクチ語と同じような分裂が観察される。関係節化において, S と P が対象の場合にはヴォイスの変更は必要ないが, A が対象の場合には, (11) が

示すとおり逆受動態が必須である。

- (11) *nunamyn' lag-i-kak' yuk myg'numak' Siberian Yupik*  
 hole.ABS dig-ANTIP-PART man.ABS become.tired.PST  
 'The man (A) who was digging the hole was tired.' (Kazenin 1994: 90)

一方、目的構文における同一指示項の省略（コントロール構文の一種）についてはやはり対格型のアラインメントを示す。Kazenin (1994: 90) によると、主節における A または S が、目的節 (purposive clause) の A または S と同一指示の場合には、(12a) のように目的を表す補語標識 *-nalu-* が使用される。この時、非同一指示項のみ、その人称・数が代名詞接辞によって動詞に標示され、同一指示項の人称・数は動詞に標示されない。一方、主節における P が目的節の A または S と同一指示の場合には、(12b) のように *-nala-* の代わりに *-sk'ylyu-* が使用される。この場合、P と同一指示の S または A の人称・数は代名詞接辞によって動詞に標示される。<sup>7)</sup>このように、同一指示項の削除が可能なのは、目的節の削除対象、および削除のコントローラーがいずれも A と S の場合であり、対格型のアラインメントである。

- (12) a. *k'umsig'yax'tukut xluk kumlag-nalu-kyk* [S → A]  
 gather.1PL.PST fire(DU) make-PURP-3DU  
 'We gather to make fire.'  
 b. *pang'y-sk'ylyu-si unitkak'amsi* [P → S]  
 die-PURP-2PL leave.1PL.A.2PL.P.PST  
 'We left you, for you to die.'

次に、同じ語族の言語でも異なる統語的アラインメント、およびアラインメントの分裂を示すという事実をマヤ諸語に属するアグアカテック語、マム語、ハカルテック語を例に確認しよう。マヤ諸語は典型的に能格型の一致を示すことで知られている (Aissen 2017)。まず、アグアカテック語、マム語、ハカルテ



c. *xnaʔn n-θ-tx'aj-oon* *b'uʔy*  
 woman REC.PST-3SG.ABS-wash-ANTIP rag  
 'It was the woman who (A) washed the rag' (Larsen 1981: 137-138)

- (15) a. *naʔ m-θ-uʔl* Aguacatec  
 who REC.PST-3SG.ABS-arrive.here  
 'Who (A) arrived?'
- b. *naʔ m-θ-θ-b'iy* *yaaj*  
 who REC.PST-3SG.ABS-3SG.ERG-hit man  
 'Who (P) did the man hit?'
- c. *naʔ m-θ-b'iy-oon* *yaaj*  
 who REC.PST-3SG.ABS-hit-ANTIP man  
 'Who (A) hit the man?' (Larsen 1981: 138-139)

これに対して、コントロール構文については言語によって異なるパターンが観察される。マム語では、(16) が例示するように、同一指示により削除される項は S と A であり対格型のアラインメントである。(16a-b) は主節主語によって引き起こされた同一指示項の削除、(16c) は主節目的語によって引き起こされた同一指示項の削除の例である。

- (16) a. *ma chin-x aaj-a b'eeta-l* Mam  
 ASP 1SG.ABS-DIR return-1SG walk-INF  
 'I (S) went (S) to walk.'
- b. *o chi eʔx xjaal laq'oo-l t-ee*  
 ASP 3SG.ABS go person buy-INF 3S-RN/PAT  
 'The people (S) went (A) to buy it.'
- c. *ma tz'-ok n-q'o-ʔn-a tx'eema-l siiʔ*  
 ASP 2SG.ABS-DIR 1SG.ERG-give-DS-1SG/2SG cut-INF firewood  
 'I made you (P/A) cut the firewood.' (England 1983a: 7)

d. <i>ø-w-ajb'el-a</i>	<i>chin</i>	<i>aq'naa-n-a</i>
3SG.ABS-1SG.ERG-want-1SG	1SG.ABS	work-ANTIP <sup>8</sup> -1SG
'I (A) want (S) to work.'		(ibid.: 8)

興味深いことに、削除をコントロールする主節の項に注目すると、異なるアラインメントのパターンが現れる。(16a-b)では、コントローラーはS、(16c)ではPである。(16d)では、従属節の動詞の項Sと同一指示である主節の項は、一人称能格の代名詞接頭辞の存在から明らかなようにAである。この場合には、動詞に人称・数の標示がなされねばならず、同一指示項の削除が許されない。つまり、同一指示項削除のコントローラーになりうるのはSとPであり、これは能格型のアラインメントである。コントローラーになりうるのがAとSの対格型アラインメントである前出のシベリア・ユピックとは、対照的である。

アグアカテック語は、ママ語と同様にコントロール構文でコントローラーになりうる主節の項がSとPに限定される (Larsen 1983: 138)。つまり、能格型のアラインメントを示す。しかし、ママ語とは異なり、(17)が示すようにAは同一指示削除の対象にはならない。(16b)と比較されたい。

(17) <i>chin-b'een</i>	<i>tan</i>	<i>ø-loq'-che-eʔn</i>	<i>txiikun</i>
1SG.ABS-go	COMP	3SG.ERG-buy-PASS-INF	bean
'I will go to buy beans.'			(Larsen 1983: 135)

(17)では、受動態の使用によりPがSに派生されて (derived-S；以降 d-S とする)、Aが中心項から降格されている (Larsen 1983: 136)。アグアカテック語の目的節は名詞化されており、名詞化された節においてはAとSの人称・数が能格接頭辞によって動詞に標示される (Larsen 1983: 138；Pは絶対格接尾辞によって標示されるため、名詞化された節の一致は対格型)。よって、(17)の三人称単数能格接頭辞 (ゼロ) は、d-Sである *beans* との一致を示している。Larsen (1983: 136) は、これを目的節におけるAの同一指示項削除 (equi-deletion；主節のSと同



一指示)の例としているが、Aが削除されているのは受動化により斜格項に降格されているためであり、(16b)のママ語の例のように、同一指示であるためではない。したがって、アグアカテック語のコントロール構文において削除対象になりうる項は、Sのみと分析するのが妥当だろう。<sup>9)</sup>

ハカルテック語ではさらに複雑な様相を見せる。まず、主節主語が同一指示項削除のコントローラーになる(18)のような構文では、アグアカテック語同様、Sのみが削除対象となり、この削除は義務的である((18a, b)参照)。(18c)が示すように、(16b)のママ語とは異なりAの削除は許容されない。そして(18d)が示すように、d-Sの削除も不可能である。<sup>10)</sup>

- (18) a. *xc-ach*                    *to*    *{\*ha-sajchi / sajch-oj}*                    Jakaltek  
           ASP-2SG.ABS go 2SG.ERG-play / play-IRR  
           ‘You (S) went to (S) play.’
- b. *ch-ø-(y)-oche*                    *naj*                    *{\*s-cañalwi / cañalw-oj}*  
           ASP-3ABS-3ERG-like CL:he 3ERG-dance / dance-IRR  
           ‘He (A) likes (S) to dance.’
- c. *\*ch-in*                    *to*    *col-o’*                    *hach*  
           ASP-1SG.ABS go help-FUT you  
           ‘I (S) go to (A) help you.’
- d. *\*ch-ø-(y)-oche*                    *naj*                    *col-lax-oj*  
           ASP-3.ABS-3ERG-like CL:he help-PASS-IRR  
           ‘He (A) likes (d-S) to be helped.’                    (Van Valin 1981: 372-373)

次に、主節の目的語によって引き起こされる同一指示項の削除は、(19a)にみられるように、ハカルテック語では随意的である(Craig 1977: 317)。<sup>11)</sup>また、この構文では主節主語がコントローラーになる構文とは違い、受動態によってPからSに派生されたd-Sも削除対象になりうる。この事実は、(18d)と(19b)の対比から明らかである。

- (19) a. *ch-oñ*                    *s-chej*                    *ya'*                    {*way-øj* / *cu-wayi*}  
 ASP-1SG.ABS    3ERG-order    CL:he    sleep-IRR / 1PL.ERG-sleep  
 'He orders us (P/S) to sleep.'
- b. *xc-in*                    *y-iptze*                    *naj*                    *il-lax-øj*                    *y-u*  
 ASP-1SG.ABS    3ERG-force    CL:he    see-PASS-IRR                    3ERG-by  
*ya'*                    *doctor*  
 CL:the    doctor                    'He forced me (P/d-S) to be seen by the doctor.'
- (Van Valin 1981: 373-374)

コントロール構文においてハカルテック語がmam語ともアグアカテック語も異なるのは、(18b)にみられるように、能格標示されたAも従属節における同一指示項削除のコントローラーになりうるという事実である。すなわち、ハカルテック語は、A, S, Pがすべて同一指示項削除のコントローラーになりうる中立型のアラインメントを示し、能格型のアラインメントを示すmam語ともアグアカテック語とも異なる様相を呈するのである。

また、ハカルテック語には、繰り上げ構文 (raising) と類似した転写構文 (copying) が存在する。<sup>12)</sup>アスペクトを表す一連の自動詞 (e.g., 'start,' 'stop,' 'cease') に埋め込まれた動詞の主語のうち、有生物主語に限ってアスペクト動詞の派生された主語に昇格することが許される。(20)がその例である。

- (20) a. *x-ø-ichi*                    *ha-munlayi*  
 ASP-3ABS-begin    2SG.ERG-work  
 'You began to work (lit. it began – you work)'
- b. *xc-ach*                    *ichi*                    *ha-munlayi*  
 ASP-2SG.ABS    begin                    2SG.ERG-work  
 'You began to work (lit. you began – you work)' (Van Valin 1981: 374)

(20a) は昇格がなされていない例であり、アスペクト動詞の主語として非指示的なデフォルトの三人称絶対格代名詞接辞が現れている。一方、昇格の起こ

った (20b) の例では、埋め込まれた節の S に当たる二人称単数が代名詞接辞によってアスペクト動詞の主語として標示されている。埋め込まれた節の形に変化がないため、この構文は繰り上げ構文というよりも、転写構文と考えるのが妥当だろう (Van Valin 1981: 374)。

Van Valin (1981: 374) によると、ハカルテック語の話者の中には、(20) のように埋め込まれた節の文法項が S の場合にのみ昇格が可能だとする話者 (Van Valin [1981] にならい Dialect 1 とする) と、通常の S に加えて受動態によって P から派生された S (21a)、さらには逆受動態によって A から派生された S (21b) にも昇格が適用可能だとする話者 (Dialect 2) に分かれるという (Van Valin 1981: 374-375)。

- (21) a. (\*)*xc-in*        *ichi-coj*        *hin-mak-lax-i*  
 ASP-1SG.ABS    begin-DIR    1SG.ERG-hit-PASS-SUFF  
 'I began to be hit.'
- b. (\*)*xc-in*        *ichi*        *hach hin-mak-ni*<sup>13)</sup>  
 ASP-1SG.ABS    begin    you    1SG.ERG-hit-ANTIP  
 'I began to hit you.'

最後に、等位構文における同一指示項の省略 (conjunction reduction) を見てみよう。Kazenin (1994: 92) によると、マム語の等位構文はおそらく中立型のアラインメントを示すとされるが、十分な情報がない。一方、アグアカテック語では、(22) にみられるように S と A の間でのみ省略が可能であり、対格型のアラインメントである (Croft 2003: 199; Larsen 1981: 141)。(22) の接辞 *-tz* は、それが生起する節の S/A が前節の S/A と同一指示であることを表す交代指示標識であるが、同一指示である名詞句に付く必要はない。<sup>14)</sup>

- (22) *b'een tiloo*    *Lu?*    *ye*    *teele?n*    *tzaaj*    *chichoojo?n*    *kobo'x*  
 he.saw.it    Pedro    the    its.leaving    hither    their.pay    some  
*ajpyaaj ...*    *niin*    *tzun*    *b'een*    *ii?tz*    *tan*    *k'otle?n*  
 merchant ...    and    then    he.went    he-tz    to    its.being.dug

*juun jul tzi b'ee? ... niin kyaaj kyeen tq'ol q'aaq'-tz*  
 one hole at.edge road ... and he.left.it fire-tz  
*tk'u?l jul*  
 in.it hole

'Pedro (A) saw some merchants receiving their pay, ... and he (S) went to dig a hole at the side of the road, ... and he (A) left the fire inside the hole, ...' (Larsen 1981: 141)

例は割愛するが、ハカルテック語の等位構文における同一指示項の削除は、AとSの間で広くみられ、Pの場合には受動態によってSに昇格させる強い傾向、つまり対格型アラインメントへの強い志向が観察されるという (Datz [1980: 103-106] の談話に動機づけられた受動構文の使用に関する議論を参照)。

以上、マム語、アグアカテック語、ハカルテック語の比較をまとめると、表1のような結果になる (ハカルテック語については、Van Valin [1981: 381] ; Van Valin & LaPolla [1997: 285] を参照)。

表1：マヤ語族3言語の統語構文とアラインメント

	言語およびアラインメント、可能な文法項		
統語構文	マム語	アグアカテック語	ハカルテック語
関係節	P, S, d-S (ANTIP) 能格型	P, S, d-S (ANTIP) 能格型	P, S, d-S (ANTIP) 能格型
分裂構文 <i>wh</i> 疑問文 (焦点構造)	P, S, d-S (ANTIP) 能格型	P, S, d-S (ANTIP) 能格型	P, S, d-S (ANTIP) 能格型
コントロール構文 主節コントローラー	P, S 能格型	P, S 能格型	P, S, A 中立型
コントロール構文 従属節削除対象	S, A 対格型	S	主語誘発型：S 目的語誘発型：S, d-S (PASS)
転写構文 (繰り上げ)	---	---	Dialect 1: S Dialect 2: S, d-S (PASS/ANTIP)
等位構文	P, S, A? (中立型?) 未確認	S, A 対格型	S, d-S (PASS), A 対格型への強い傾向

このように、単一言語の中でも能格型と対格型のアラインメントが混在するし、同じ語族に属する言語間でも統語構文によって異なるアラインメントおよび異なる文法関係が観察される。また、特定の規則が適用可能なのがSのみだとしても、そこに派生されたS (derived-S) が含まれるかどうかに関しても言語、構文により違いが観察される。さらに、派生されたSについても、受動態 (PASS) によってPから派生されたものと、逆受動態 (ANTIP) によりAから派生されたものが混在する複雑な状況が見てとれる。

Kazenin (1994) は、形態的に能格型のアラインメントを示す10言語の統語的振る舞いの分析に基づき、「等位構造縮約 (等位構文) > 目的構文の同一指示項削除 (コントロール構文) > 関係節化」という含意階層を提示した。<sup>15)</sup>これは、階層の上位の構文で能格型のアラインメントを示す言語は、下位の構文においても同様に能格型のアラインメントを示すというものである。前出のチュクチ語では、(否定小辞による) 関係節化においてのみ能格型アラインメントがみられた。ジルバル語では、これら3つの構文のすべてで能格型アラインメントが観察される。このように、統語的能格性は程度の問題であり、言語によってその度合いが異なる。つまり、Anderson (1976) の主張とは異なり、(4-8) のような形態的なアラインメントの分裂のみならず、(9-22) のような統語的なアラインメントの分裂も、実際には決して稀ではない。

### 2.3. この節のまとめ

この節の議論をまとめよう。個別言語の名詞、動詞、形容詞といった品詞や、主語、目的語といった文法関係などのカテゴリーは、個々の言語特有の形態統語的基準 (つまり構文) によって規定されるため、それらが普遍的、通言語的なカテゴリーの具体例であるとする根拠はなく、言語個別的 (language-specific) である。

さらに、単一の言語内においても、個々の言語のカテゴリーやそのメンバーの形態統語的振る舞いは、すべての構文で一貫しているわけではなく、特定の構文に固有である (construction-specific)。(4) のワルピリ語や (5) のエンガ語では、「格標示構文」においては能格型アラインメントを示す一方、「一致構文」

においては対格型アラインメントである。格標示構文における S と P を「主語」と呼びたければ呼んでも良いが、それは一致構文における主語 (S と A) とは異なる。また、アグアカテック語では、関係節構文、分裂構文、*wh* 疑問構文においては能格型アラインメントであり、S と P が主語となるが、等位構文 (の同一指示項の省略) においては対格型で A と S が主語となる。さらに、これらのアラインメントや文法関係を規定する基準となる構文の形態統語的構造は言語によって異なるため、アグアカテック語の等位構文における主語 (A と S) が、日本語や英語の等位構文における主語 (両言語において A と S) と同じ「主語」であるという保証は、実際にはどこにもないのである。

Dixon (1979: 59, 1994) は、S と A からなるカテゴリーを普遍的な深層主語 (“deep structure subject”) と前提し、関係節化やコントロール構文のアラインメントによって規定される「言語個別的な」文法関係 (“shallow structure”) を軸項 (pivot) と呼んで主語と区別する。これによれば、マム語の関係節化は能格型の軸項、コントロール構文の同一指示項削除 (削除対象) は対格型の軸項となる。このように、多くの (形態的能格) 言語は、実際には混合軸項言語 (mixed pivot language) である。

RRG (Role and Reference Grammar) では、70 年代の後半から文法関係が普遍的ではなく構文に特有であるとして (Foley and Van Valin 1977)、特定の形態統語的な構文において特権的な振る舞いを示す項を、特権的統語項 (PSA = privileged syntactic argument) と呼び、主語という用語を排除している (Van Valin and LaPolla 1997)。表 1 で確認したハカルテック語のアラインメントおよびそれに基づく文法関係の調査では、7 つの文法構文において実に 5 つの特権的統語項が同定される (Van Valin 1981: 381)。

これらの知見を踏まえ、文法関係の言語個性および構文個性を重く見る新しい枠組みが、Witzlack-Makarevich and Bickel (2018) である。彼女らは、上述の議論に挙げられた格標示構文、一致構文、等位構文、関係節構文、分裂構文などを含む形態統語的構文を「項セクター」(argument selectors) と呼び、一定の「条件」(conditions: 示差的項標示 [分裂能格性や示差的目的語標示] を動機づける TAM の特徴、節の性質 [主節か従属節か]、項の人称など) のもとで、項セク

ターによって同じ扱いを受ける (aligned) 項の集合を「文法関係」と定義する。このアプローチでは, “every single construction can, in principle, establish a different grammatical relation” ということになり (Witzlack-Makarevich 2018: 4), 同じ枠組みにしたがい様々な言語の包括的な文法関係の記述を目指している。

Bickel (2011: 400) が指摘するとおり, 伝統的な文法関係の考え方は, 格標示, 一致標示, 関係節化, コントロール構文, 等位構文といった形態的, 統語的な構文を, 文法関係を特定するための単なる道具としてしか見ておらず, そこにはそれ自体が考察に値する文法手段であるという視点が欠落している。例えば, 格標示が能格型, 一致標示が対格型というアラインメントの分裂は, ワルピリ語 (4) やエンガ語 (5) 以外にも複数の言語にみられるが, それとは逆の, 格標示が対格型で一致標示が能格型のアラインメントを示す言語は (おそらく) 確認されていない (Mallinson and Blake 1981: 72)。これは, 能格型の一一致標示が能格型の格標示に比べて稀であることと関係する (Haspelmath 2005: 7 の Generalization 1)。また, 格標示が間接型, 一致標示が二次型というアラインメントの分裂は, ワルピリ語 (4) やヒョウ語 (8) にみるように一般的だが, 格標示が二次型で一致標示が間接型という逆の分裂パターンは極めて稀である (Malchukov et al. 2010: 10)。これは二次型の格標示が稀であることに部分的に起因する (Haspelmath 2005: 5)。さらに, 目的語の一致標示の有標性に注目すると, P と T の人称・数が同形式の形態素で動詞に標示される間接型は広く観察される。また, R のみが標示される間接型も少数ではあるが確認されている (e.g., グデ語 [Gude]: チャド諸語)。一方, P と R が同形式で標示される二次型は広く観察されるものの, T のみが標示される二次型アラインメントは確認されていない (Siewierska 2003: 356)。これは T が典型的に無生物であり, 話題性が低いことと関連する。格標示と一致標示をいずれも主語や目的語を特定するためのテストとしてしか見ていなければ, それぞれの構文がなぜ特定のアラインメントへの選好を示すのか (一致構文は対格型アラインメントへの強い選好を示す; 格標示は間接型アラインメントへの強い選好を示す) は問題にならない。同様に, Kazenin (1994) の提案する含意階層において, なぜ等位構文が最も上位に位置するのか, つまり能格型のアラインメントを退ける傾向にあるのかを不問に付す。し

かし、言語の普遍性、多様性の解明には、なぜ特定の構文があるアラインメントへのバイアスを示すのか、その認知的、機能的動機を追究する必要があるだろう (cf., Malchukov 2014)。

このように、個別言語における動詞や主語といったカテゴリーは、その言語特有の、特定の形態的、統語的な構文における振る舞い(分布)によって定義されるため、構文ごとに異なるし、(構文は言語個別的であるため)言語ごとに異なる (Croft 2001)。この事実はここ 10 年、20 年ほどの間に広く受け入れられるようになった。では、このような状況のもとで言語間の比較はどのようにして可能なのだろうか。

### 3. 比較概念と言語間の比較

前節で確認したとおり、個別言語におけるカテゴリーは言語個別的な構文における分布によって規定されるため言語個別的であり、それらを直接に比較することはできない。よって、言語間の比較にはそれ専用の基準が必要となる。個々の言語の形態統語構造は異なるため、普遍的に適用可能な定義はおのずと意味や機能に基づくものとなる。以下、2つの具体的な比較概念と、言語間の比較におけるその有効性を検討しよう。

#### 3.1. Haspelmath (2011) : 比較概念としての A, S, P, T, R

はじめに、Haspelmath (2011) によるアラインメントの種類のための文法役割 (S, A, P, R, T) に関する議論を考察する。比較概念としての文法役割の定義は、本稿で提示したものよりもずっと限定的なものである。まず Haspelmath は、物理的变化を表す “kill” や “break” などを含む典型的な他動詞節においてのみ、A と P が容易に特定可能だとして、それ以外の他動詞節は考察の対象外とする (Lazard 2002 も参照)。これは、例えば心理述語を含む他動詞節など、典型から外れる他動詞節は、その項の形態統語的表現が言語間で大きく異なるため、比較が容易でないことを見越してのことである (例えば、アイスランド語の斜格主語文や日本語の二重主語文)。つまり、A や P を統語的な概念としながら



も、言語間でその表現がかなりの程度一定である、agent と patient およびそれらにできる限り近似した意味役割を持つ項を含む、典型的な（他動性の高い）他動詞節のみに基づき A と P を定義するわけである。

とりわけ興味深いのは、S の扱いである。A と P の規定と同様に、言語間でより統一性、共通性を示す一部の述語、節に焦点を絞って S の規定を試みる。Haspelmath の提案は“die”や“rot”のような非意図的な状態変化を表す非対格動詞の唯一項を、比較概念としての S と定義するというものである (ibid.: 561)。この提案の明確な根拠は提示されていないが、以下の 2 つが考えられる。1 つ目は、意図的行為を表す非能格動詞の典型である移動様態動詞は、*swim the river* や「空を飛ぶ」、「5 キロを (20 分で) 走る」など中間経路や距離を（少なくとも表面上）目的語として取ることもあり、項を 1 つのみ含む節を作る典型的な自動詞とは言いにくい。2 つ目は、文法役割を比較概念として定義することにより、受動構文を比較概念として定義することが可能だと考えているためだろう (Haspelmath 2011: 539)。受動構文を「A を斜格項、P を S のように表現する特殊な構文（つまり能動構文と比べて機能的に制限された構文）」とするならば、S を意味的に一貫したカテゴリーにするために（通常の S と受動構文により派生された S を同質にするために）、意味役割として patient、もしくはそれに近い項を取る自動詞に限定する必要がある。比較概念としての S をこのように限定的に定義した場合、活格型言語は、おのずとアラインメントの類型から除外されることになる (Haspelmath 2011: 561-562)

T と R、およびそれを含む複他動詞節の表現は言語ごとにさらに多様であるため、Haspelmath は複他動詞節に現れる最も典型的な動詞“give”のみに分析を限定することを提案する。実際、Haspelmath (2005) は、動詞“give”のみに焦点を絞って、複他動詞構文のアラインメントの類型を試みている。しかし、“give”のみに対象を限定するにしても、さらに問題が残る。例えば、英語のようにアラインメントの交替を許す言語は少なくないし（二重目的語構文 [e.g., *John gave Mary a book*] は中立型であるが、前置詞と格構文 [e.g., *John gave the book to Mary*] は間接型アラインメント)、トライ語のように‘give’に当たる動詞が三項動詞ではなく二項動詞 (mono-transitive verb) である言語もある (Foley 2007: 377)。ツオツイ

ル語 (Tzotzil; マヤ語族) やハルコメレム語 (Halkomelem; セイリッシュ語族) などは複他動詞を全く持たず, ‘give’を表す動詞でさえも適用形 (applicative) で派生される必要がある (Malchukov et.al. 2010: 49)。

このように, 言語間で共通性を示す部分だけに限定した比較概念の定義をしているため, 通言語的な比較は必然的に部分的にならざるを得ない。Haspelmath (2011: 559) 自身が指摘するとおり, とりわけ ‘give’ のみに限定した目的語のアラインメントが, 果たして “major alignment type” といえるのかどうか, そのアラインメントの類型に基づいてどの程度意味のある通言語的な一般化が導き出せるのかには疑問の余地が残る。

また, Haspelmath (2018: 96) では, 主語の比較概念を A と S を含むカテゴリーと規定する。上述のように定義された A と S からなる比較概念としての主語は, Comrie (1989) の考える主語のプロトタイプ—意味役割としては動作主, 語用論的役割としては話題—とは異なるし, 個別言語の主語というカテゴリーのメンバーの多くを排除するものとなろう。したがって, これに基づく, 例えば語順に関する通言語的な一般化も同様に限定的になる。

Haspelmath の比較概念を用いた言語間の比較は, 語彙的なヴァリエーションも含めて (物理的な働きかけを表す動詞から心理述語まで) あらゆる構文における文法役割のグルーピング, つまり文法関係を包括的に記述しようという Witzlack-Makarevich and Bickel (2018) のアプローチとは, 根本的に異なるわけである。

### 3.2. Croft (to appear) : 比較概念としての構文を用いた主要な品詞の通言語的分析

次に, 比較概念を用いた Croft (to appear) の品詞の分析を見てみよう。この分析の大枠は, Croft (2001) と変わりはないが, 比較概念と個別言語の記述の論争を踏まえて, 構文文法の立場から「構文」を明確に比較概念として定義している点が, 特に注目値する。その定義は「意味内容と談話機能の特定の結びつきを表す形式と機能のペア」というものである (ibid.: 18)。<sup>16)</sup> また, Croft は構文とは別に, 「方略」(strategy) という比較概念を導入する。方略とは, 「意

味内容と命題行為の特定の結びつきを表現する構文」を指す。

表 2 は、3つの意味クラスと3つの命題行為機能の結びつきを表す構文（比較概念）を示している（Croft to appear: 29）。

表 2：比較概念としての名詞，動詞，形容詞

意味 クラス	命題行為		
	指示	修飾	叙述
物体	名詞（相当）句 nominal phrase head: <b>noun</b>	修飾名詞（相当）句 nominal modifier phrase	叙述名詞（相当） predicate nominal
属性	脱形容詞指示句 deadjectival referring phrase	形容詞（相当）句 adjectival phrase head: <b>adjective</b>	叙述形容詞（相当） predicate adjectival
行為	補文（節） complement (clause)	関係節 relative clause	動詞（相当）節 verbal clause head: <b>verb</b>
全部の意味	指示句 referring phrase head: referent expression	限定句 attributive phrase head: modifier	節 clause head: predicate

まず、Croft は表す意味クラスにかかわりなく、指示という命題行為を行う構文を指示句 (referring phrase)、修飾という命題行為を行う構文を限定句 (attributive phrase)、叙述という命題行為を行う構文を節 (clause) と規定する。そのうえで、名詞とは特に物体を表す指示句、つまり名詞句 (nominal phrase) の主要部、形容詞とは特に属性概念を表す限定句、つまり形容詞句 (adjectival phrase) の主要部、動詞とは特に行為を表す節、つまり動詞節 (verbal clause) の主要部であると定義する。網掛けは、指示句のプロトタイプが名詞句であり、その主要部が名詞、限定句のプロトタイプが形容詞句であり、その主要部が形容詞、節のプロトタイプが動詞節であり、その主要部が動詞であることを示している。

重要な点をいくつか整理しよう。まず、2.1 で確認したように、類型論的には当該の語はその形態統語的な特徴によって特定の品詞のメンバーと規定され

るわけではない。例えば、*the interesting books* の *book*, 「面白い本 (を)」の「本」は、冠詞や複数を表す接尾辞 *-s* を取るからとか (英語の *book*), 格標示を受けるからとか (日本語の「本を」), 形容詞で修飾されるから名詞だというわけではなく、物体を指示する機能を担った形式、すなわち名詞句構文の主要部だからである。このような機能的な定義はどの言語にも適用可能であるため、名詞は比較概念となりうるわけである。

2つ目は、このように定義された類型論的な比較概念としての名詞、動詞、形容詞は、形態統語的な構文における分布という言語個別的な基準によって規定される個々の言語の品詞に対応するものではない。例えば、英語の名詞は冠詞との共起可能性や数の屈折といった英語特有の形態統語的な基準によって定義されるものであり、数と格の屈折という形態的基準で定義されるロシア語の名詞とは異なる。よって、英語やロシア語の名詞 (それぞれの形態統語的振舞いで規定された名詞) は、通言語的な名詞の比較には不適格であり、通言語的比較の目的で規定された比較概念としての名詞とは異なる。Haspelmath (2010, 2019) が強調するように、比較概念がタイプであり、個別言語のカテゴリーがそのトークンであるというような、タイプ・トークンの関係が成立しないということである。

3つ目は、2つ目と関係するが、名詞、動詞、形容詞の比較概念は、表2の網掛け部分のプロトタイプ構文に限定される。例えば、*he is a doctor* という叙述名詞構文の *doctor* は、類型論的には (Croft の枠組みでは) 名詞としては扱われない。英語では、名詞句構文であろうと叙述名詞構文であろうと (つまり異なる構文においても)、*doctor* が冠詞や複数を表す接尾辞を取ることも可能であるため (e.g., *they are doctors*) — つまり同じ形態統語的な振舞いを見せるため — 後者の *doctor* を名詞として扱わないことに疑問を感じるかもしれない。しかし、これはあくまでも英語に関する事実であり、叙述名詞構文一般に関する事実ではない。実際、(2b) の例で見たように、マカ語の 'white man' にあたる語幹は、(2a) の動詞 (動詞節の主要部) と同じように人称・数、ムードの屈折を示す。2つ目の点で確認したとおり、個別言語の品詞は言語ごとに異なるため、同じ叙述名詞構文であったとしても、英語の *he is a doctor* の *doctor* は名詞だが、対応す

るマカ語の (2b) の 'white man' にあたる語幹は動詞だとする分析には、なんら矛盾するところはない。

表 1 の 9 つの構文の中でグレイに塗られた構文がプロトタイプであるのは、アプリアリに決まっているわけではなく、実際の言語使用において、その 3 つの意味クラスと命題行為機能の組み合わせが、通言語的に最も頻度が高いという理由による (Croft 1991: 87-93)。ある語が非典型的な命題行為機能を担う場合、その意味クラスと命題行為機能の組み合わせの頻度が低いために、その命題行為機能を特定するのが困難となる。これが原因でより明示的な手段で表現されるわけである。例えば、英語の *student* や日本語の「学生」が、修飾という非典型的な命題行為機能を担う場合 (修飾名詞句構文に生起する場合)、*student's book* や「学生の本」のように属格標示が必要となる。このように、通言語的にプロトタイプの構文は頻度の低いその他の構文と比べて、よりシンプル、または少なくとも同じ複雑さを持つ形式で表され、その品詞特有の形態統語的特徴 (behavioral potentials) をより多く示す。

このように機能に基づき通言語的に名詞、動詞、形容詞といった品詞を規定したうえで、表 2 のそれぞれの構文が個々の言語でどのように表現されるのか、つまり具体的な文法形式の比較ができる。ここで、重要となるのが方略である。上述の叙述名詞構文を例に取れば、英語の *he is a doctor* は、人称・数や時制の屈折を示すコピュラを使った方略 (inflected copula strategy) である。一方、(2b) に例示されるマカ語は人称・数やムードの屈折を示す物体を指示する語を使った方略 (inflected object word strategy) を採用する。英語にみられる前者の方略は、物体の指示のための方略 (名詞句構文) と関連しているが、マカ語にみられる後者の方略は行為を叙述するための方略 (動詞節構文) と関連している。また、英語と同様に叙述名詞構文の表現に物体を指示するための方略を援用する言語の中には、ロシア語のように (現在時制の場合) コピュラを使用しない言語もあるし、日本語や中国語のようにコピュラを省略することが可能な言語もある。ここで通言語的な比較の対象になっているのはあくまでも比較概念としての叙述名詞構文の主要部であり、それが個々の言語でどの品詞に属するかとはかかわりなく、この構文が個々の言語においてどのような方略で表現される

のか（つまり具体的な文法形式）を比較できるわけである。

Croft (2001: 103) が強調するように、品詞に関する普遍的な理論はプロトタイプだけを規定し、カテゴリーの境界は規定しない。カテゴリーの境界はあくまでも形態的、統語的構文における分布によって決定された個別言語のカテゴリーの問題であり、言語間の比較の範疇外にあるとされる。このように、Croft の理論でも Haspelmath のそれと同様に、言語間の比較はかなり限定されたものとなる。比較可能性を十分に考慮した言語間の比較が、いかに困難かつ限定的にならざるをえないかについては、Rijkhoff (2016) の議論も非常に緻密で参考になる。

#### 4. 結び

本稿では、個別言語の記述カテゴリーと比較概念を明確に区別するべきだという Haspelmath (2010 など) の主張の内実と根拠を、主に品詞、アラインメント、文法関係に関する具体例を取り上げて考察した。個別言語の研究成果の集積により、とりわけ 1990 年代から言語の多様性が大きくその姿を現し、言語相対論が再び注目されるようになった (Evans and Levison 2009; Levinson and Gumperz 1996)。これにより、言語間の比較可能性が（より）大きな問題として持ち上がり、従来の言語間の比較の手法が疑問視されるようになった (Croft [2001: 30-47] の言う *methodological opportunism*)。あらゆる形態統語カテゴリーは言語個別のであり、さらに単一言語内においても構文特有だとすれば、言語間の比較は当然困難を極める。

このような流れの中で、明確な定義と客観的基準に基づく言語間の比較を模索する動きとして、Haspelmath や Croft らのアプローチが提案されている。また、形態統語カテゴリーの言語個性および構文固有性を受け入れ、従来の研究においては重視されることのなかった様々な構文における文法関係、アラインメントを包括的に記述する（個別言語の）研究も、同時に類型論の分野で始められている。個別言語の記述と、言語間の比較による普遍性・多様性の解明を、それぞれがそれぞれに資するようにどのように折り合わせていくのが、

きわめて困難ながらも何より重要な課題である。

## 略号

ABS: absolutive; ANTIP: antipassive; ASP: aspect; CAUS: causative; CL: classifier/noun class; COMP: complementizer; CONCL: conclusive; DAT: dative; DEF: definite; DEM: demonstrative; DET: determiner; DIR: directional marker; DU: dual; ERG: ergative; FUT: future; IND: indicative; INF: infinitive; INS: instrument; IRR: irrealis; LOC: locative; M: masculine; MON: momentaneous aspect; NEG: negator; NMLZ: nominalizer; NOM: nominative; NPST: non-past; OBJ: object; PART: particle; PASS: passive; PASS.PTCP: passive participle; PAT: patient; PL: plural; PRS: present; PST: past; REAL: realis; REC.PST: recent past; REDUP: reduplication; REM: remote tense; RN: relational noun; PURP: purposive; SG: singular; SBJ: subject; SUFF: suffix; VAUG: argument vowel on nouns

## 注

- 1) 本稿は、2022年3月に開拓社より出版予定の論文集『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集』に寄稿した「個別言語の記述と言語間の比較、そのアプローチ：言語の多様性と普遍性」に大幅に加筆したものである。また、初校段階において Shibatani (2021) の存在を知った。本稿では触れられなかったが、文法関係の議論について重複する部分があるため、併せて参考にされたい。
- 2) Joos (1957: 96) が述べるように、“languages can differ without limit in unpredictable ways”であったとすれば、言語間の比較は不可能（つまり、個々の言語のカテゴリーは完全に incommensurable）ということになる。
- 3) イルガル語に親族名詞が存在しないわけではなく、呼びかけなどには名詞しか使用されない。詳しくは、Evans (2000) を参照。また、親族動詞はイロコイ諸語やユト・アステカ諸語などにもみられる。親族関係は文字通り「関係」（二者間）を表すため（つまり、父、母は必ず誰かの父、母）、これを（静的な関係ではあるが）他動詞で表現する言語が存在したとしても、それほど驚くべきことではないかもしれない。
- 4) 興味深いことに、(1c) では息子が殺されたことにより、話者との親族関係が終了したものとされ、時制が過去形になっている。
- 5) Van Valin (2005: 109-110) に合わせて、助動詞に付接する一致標示 (cross-referencing) のグロスの一部変更した。
- 6) 英語のように非常に強い対格性を示す言語でさえ、統語的能格性を一部示すことは良く知られている。例えば、Comrie (1979: 226) が指摘するように、“those come to



see Dr. Smith should wait in Room 5 (i.e., those who [= S] have come)”, “those wounded in the leg should go to surgery 2 (i.e., those whom [= P] (someone) has wounded)” のように S と P を関係節化の対象とした過去分詞構文は成立するが, “those eaten poison (i.e., those who have eaten poison)” のように A の場合にはそれが成立しない。また, 名詞化 (nominalization) においても能格性が見られる。例えば, *the arrival of the king* (S), *the destruction of the city* (P) *by the enemy* (A) に見られるように, 名詞化された節において S と P は属格で標示されるのに対し, A は *by* で標示される (ロシア語でも同様に S, P は属格で, A は具格で標示される)。対格言語における能格的振る舞いについては, Keenan (1984) も参照。

- 7) Kazenin (1994: 90) によると, “(w) hen *-sk'yly-* is used, an S or A which is coreferential with O (= P here) in the main clause can be cross-referenced in the verb” とあるため, 代名詞接辞による人称・数の一致標示は随意的であるかもしれない。
- 8) マム語の動詞 *aq'naa* ‘work’ は他動詞であり, ここでは不定, 不明の P を脱焦点化するために逆受動態が使用されている (England 1983b: 214)。主節の動詞に標示された三人称単数絶対格標示は補文節との一致を示す (England 1983a: 8)。
- 9) 主節目的語がコントローラーになる目的節の同一指示項削除についても, (16c) のマム語とは異なり, A は削除対象にならない (Larsen [1983: 135] の例 (48) 参照)。
- 10) Verhoeven (2007: 137) のよると, ユカテコ語 (Yucatec Maya) では, 主節主語 (A, S) がコントローラーである場合には, *equi* の削除対象が S と d-S に限定されるという。一方, 主節目的語 (P) がコントローラーの場合には, S, d-S 以外に A も削除対象になりうる (つまり対格型アラインメント)。よって, マム語ともアグアカテック語ともハカルテック語とも異なる。
- 11) 対応するマム語, アグアカテック語のコントロール構文において, 同一指示項の削除が随意的であるかどうかについては十分な情報がない。
- 12) マム語, アグアカテック語に, このような転写構文が存在するかどうかは不明である。
- 13) Craig (1977) は能格標示 *bin-* の存在を根拠に (18b) の文末の接尾辞 *-n* (*i*) を逆受動接辞 (同形式) とは別の, 脱他動化接尾辞 (detransitivizing suffix) とみなしているが, Van Valin (1981: 376-378) はこれを逆受動接辞と分析する。ここでは, Van Valin の分析を採用する。
- 14) Larsen (1981: 140) によれば, 交代指示標識 (SS: 同一主語) *-tz* は義務的ではない。
- 15) Croft (2003: 199) は, これに一致と格標示を加えた「等位構文 > コントロール構文 > 関係節 > 一致 > 格標示」という含意階層を, 主語構文階層 (Subject



Construction Hierarchy) として提示している。さらに、目的語の統語的アラインメントの分裂を含めたより詳細な考察については、Malchukov (2014) を参照。

16) Croft (to appear: 5) は、談話機能ではなく information packaging と呼ぶ。

## 参考文献

- Aissen, Judith. 2017. Correlates of ergativity in Mayan. In Jessica Coon, Diane Massam, and Lisa Demena Travis, (eds.), *The Oxford Handbook of Ergativity*, 737-758. Oxford: Oxford University Press.
- Anderson, Stephen R. 1976. On the notion of subject in ergative languages. In Charles N. Li, (ed.), *Subject and Topic*, 1-23. New York: Academic Press.
- Arkadiev, Peter M. 2008. Thematic roles, event structure, and argument encoding in semantically aligned languages. In Mark Donahue and Søren Wichmann, (eds.), *The Typology of Semantic Alignment*, 101-117. Oxford: Oxford University Press.
- Austin, Peter. 2005. Unpublished Ms. (<http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.431.1627&rep=rep1&type=pdf>)
- van der Auwera, Johan, and Kalyanamalini Sahoo. 2015. On comparative concepts and descriptive categories, *such as they are*. *Acta Linguistica Hafniensia* 47-2: 136-173.
- Bickel, Balthasar. 2011. Grammatical relations typology. In Jae Jung Song, (ed.), *The Oxford Handbook of Linguistic Typology*, 399-444. Oxford: Oxford University Press.
- Bickel, Balthasar, and Yogendra P. Yadav. 2000. A fresh look at grammatical relations in Indo-Aryan. *Lingua* 110: 343-373.
- Blake, Barry. 1976. On ergativity and the notion of subject. *Lingua* 39: 281-300.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Comrie, Bernard. 1979. Degrees of ergativity: Some Chukchee evidence. In Frans Plank, (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*, 219-240. London: Academic Press.
- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Cristofaro, Sania. 2008. Grammatical categories and relations: Universality vs. language-specificity and construction-specificity. *Language and Linguistic Compass* 3-1: 441-179.
- Craig, Colette Grinevald. 1977. *The Structure of Jacalteco*. Austin: University of Texas Press.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William. 2003. *Typology and Universals*, 2<sup>nd</sup> edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. To appear. *Morphosyntax: Constructions of the World's Languages*. (<http://www>.

- unm.edu/~wcroft/WACpubs.html).
- Datz, Margaret J. Dickeman. 1980. *Jacaltec Syntactic Structures and the Demand of Discourse*. University of Colorado, University Microfilms International.
- Dixon, R. M. W. 1979. Ergativity. *Language* 51-1: 59-138.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dryer, Matthew S. 1986. Primary objects, secondary objects, and antitativity. *Language* 64-2: 808-845.
- Dryer, Matthew S. 1997. Are grammatical relations universal? In Joan L. Bybee, John Haiman and Sandra A. Thompson, (eds.), *Essays on language function and language type: Dedicated to T. Givón*, 115-143. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- England, Nora C. 1983a. Ergativity in Mamean (Mayan) languages. *International Journal of American Linguistics* 49: 1-19.
- England, Nora C. 1983b. *A Grammar of Mam, a Mayan Language*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Evans, Nicholas. 2000. Kinship verbs. In Petra M. Fogel and Bernard Comrie, (eds.), *Approaches to the Typology of Word Classes*, 103-172. Berlin/Philadelphia: Mouton de Gruyter.
- Evans, Nicholas, and Stephen C. Levinson. 2009. The myth of language universals: Language diversity and its importance to cognitive science. *Behavioral and Brain Sciences* 32: 429-492.
- Foley, William A. 2005. Semantic parameters and the unaccusative split in the Austronesian language family. *Studies in Language* 29-2: 385-430.
- Foley, William A., and Robert D. Van Valin Jr. 1977. On the viability of the notion of 'subject' in Universal Grammar. *BLS* 3: 293-320.
- Gordon, Lynn M. 1986. *Maricopa morphology and syntax*. University of California Publications in Linguistics 108. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Hale, Kenneth. 1983. The Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1: 5-47.
- Harris, Alice C. 1981. *Georgian Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Harris, Alice C. 1982. Georgian and the unaccusative hypothesis. *Language* 58-2: 290-306.
- Haspelmath, Martin. 2005. Argument marking in ditransitive alignment types. *Linguistic Discovery* 3-1: 1-21.
- Haspelmath, Martin. 2007. Pre-established categories don't exist—Consequences for language description and typology. *Linguistic Typology* 11-1: 119-32.
- Haspelmath, Martin. 2010. Comparative concepts and descriptive categories in crosslinguistic studies. *Language* 86-3: 663-687.
- Haspelmath, Martin. 2011. On S, A, P, T, and R as comparative concepts for alignment typology.

- Linguistic Typology* 15: 535–567.
- Haspelmath, Martin. 2019. How comparative concepts and descriptive linguistic categories are different. In Daniël Olmen, Tanja Mortelmans and Frank Brisard, (eds.), *Aspects of Linguistic Variation*, 83–114. Berlin/Philadelphia: Mouton de Gruyter.
- Himmelmann, Nikolaus P. 2021. Against trivializing language descriptions (and comparison). *Studies in Language* (online).
- Hirose, Yukio. 2014. The conceptual basis for reflexive constructions in Japanese. *Journal of Pragmatics* 68: 99–116.
- Jacobsen, William H., Jr. 1979. Noun and verb in Nootkan. *The Victoria Conference on Northwestern Languages*. (British Columbia Provincial Museum Heritage Record No. 4.) Victoria, B. C.: British Columbia Provincial Museum, 83–155.
- Joos, Martin, (ed.). 1957. *Readings in Linguistics* I. Chicago: University of Chicago Press.
- Kazenin, Konstantin I. 1994. Split syntactic ergativity. *STUF* 47-2: 78–98.
- Keenan, Edward L. 1976. Towards a universal definition of “Subject”. In Charles N. Li, (ed.), *Subject and Topic*, 305–333. New York: Academic Press.
- Keenan, Edward. 1984. Semantic correlates of the ergative/absolutive distinction. *Linguistics* 22: 197–223.
- Keenan, Edward L., and Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8-1: 63–99.
- 古賀裕章. To appear. 「個別言語の記述と言語間の比較, そのアプローチ: 言語の多様性と普遍性」『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集』東京: 開拓社.
- Larsen, Thomas W. 1981. Functional correlates of ergativity in Aguacatec. *BLS* 7: 136–153.
- Larsen, Thomas W. 1983. Aguacatec Syntax from a Functional Perspective. In Alice Schlichter, Wallace L. Chafe, and Leane Hiton, (eds.), *Reports from the Survey of California and other Indian Languages*, Vol. 4 (*Studies in Mesoamerican Linguistics*), 120–219. (<https://escholarship.org/content/qt3mh3411v/qt3mh3411v.pdf>)
- Lazard, Gilbert. 2002. Transitivity revisited as an example of a more strict approach in typological research. *Folia Linguistica* 36: 141–190.
- Levison, Stephen C., and John J. Gumperz, (eds.). 1996. *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N., and Ranier Lang. 1979. The syntactic irrelevance of an ergative case in Enga and other Papuan languages. In Frans Plank, (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*, 307–324. London: Academic Press.
- Malchukov, Andrej. 2014. Resolving alignment conflicts: A competing motivations approach. In

- Brian MacWhinney, Andrej Malchukov, and Edith Moravcsik, (eds.), *Competing Motivations in Grammar and Usage*, 17–41. Oxford: Oxford University Press.
- Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath, and Bernard Comrie. 2010. Ditransitive constructions: A typological overview. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath, and Bernard Comrie, (eds.), *Studies in Ditransitive Constructions*, 1–64. Berlin/Philadelphia: Mouton de Gruyter.
- Mallinson, Graham, and Barry J. Blake. 1981. *Language Typology*. Amsterdam: North-Holland.
- Manning, Christopher D. 1995. Ergativity: Argument Structure and Grammatical Relations. Stanford University: ProQuest Dissertations Publishing. (<https://www.proquest.com/docview/304227136?pq-origsite=gscholar&fromopenview=true>)
- Mosel, Ulrike. 1984. Tolai Syntax and its Historical Development. *Pacific Linguistics*, Series B 92: The Australian National University.
- Newmeyer, Frederick J. 2007 Linguistic typology requires cross-linguistic formal categories. *Linguistic Typology* 11-1: 133–157.
- Newmeyer, Frederick J. 2010. On comparative concepts and descriptive categories: A reply to Haspelmath. *Language* 86-3: 688–695.
- Nichols, Johanna. 1986. Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* 62-1: 56–119.
- Peterson, David A. 2003. Agreement and grammatical relations in Hyow. In David Bradley, Randy LaPolla, Boyd Michialovsky and Graham Thurgood, (eds.), *Language Variation: Papers on Variation and Change in the Sinosphere and Indosphere in Honor of James A. Matisoff*, 173–184. Canberra: Pacific Linguistics.
- Rijkhoff, Jan. 2016. Crosslinguistic categories in morphosyntactic typology: Problems and prospects. *Linguistic Typology* 20-2: 333–363.
- 柴谷方良. 1985. 「主語プロトタイプ論」『日本語学』4: 4-16.
- Shibatani, Masayoshi. 2021. Syntactic Typology. *Oxford Research Encyclopedias, Linguistics*. Oxford: Oxford University Press (online). (<https://doi.org/10.1093/acrefore/9780199384655.013.154>)
- Siewierska, Anna. 2003. Person agreement and the determination of alignment. *Transactions of the Philological Society* 10-2: 339–370.
- Swartz, Stephen M. 1985. Pragmatic structure and word order in Warlpiri. *Papers in Australian Linguistics* 17: 151–166.
- Van Valin, Robert D. Jr. 1981. Grammatical relations in ergative languages. *Studies in Language* 5-3: 361–394.
- Van Valin, Robert D. Jr., and Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Verhoeven, Elisabeth. 2007. *Experiential Constructions in Yucatec Maya*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Witzlack-Makarevich, Alena. 2018. Argument selectors: An introduction. In Alena Witzlack-Makarevich and Bickel Balthasar, (eds.), *Argument Selectors: A New Perspectives on Grammatical Relations*, 1–38. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Witzlack-Makarevich, Alena, and Bickel Balthasar, (eds.). 2018. *Argument Selectors: A New Perspectives on Grammatical Relations*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.